
戦場に舞う蛍 ファイアフライ

六上孝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場に舞う螢 ファイアフライ

【Nコード】

N7865L

【作者名】

六上孝

【あらすじ】

オーギュスト歴1942年に突如として電撃戦を仕掛けられた北ヨーロッパの小国での戦争を一兵卒を中心に見る戦記もの

平和だった彼らの生活は戦争へと突入した。

航空機も出ます。残酷は薄め。

あくまで架空。

面白かったら評価とお気に入り登録をしてやってください。

活動報告見ていただいたら個人的に喜びます。

イラスト、キャラデザ等も募集中。

ブログ、始めました。 主張はだいたいそこに書きます
<http://mukamitaka1208.blogspot.fc2.com/>

設定集（前書き）

そのまま設定集です。見なくても多分良い。

設定集

人物

ヴィレム・ドールマン（28）

ヒ サ村在郷軍人隊長 予備役第4師団第2大隊第1中隊長。中尉
ヒ サ村出身の軍人。先のラッシュ皇帝紛争では特殊部隊の先任曹長として活躍するも左遷され現在に至る。

温厚で憎めない性格だが内には絶対に守るべきものを守るという精神を持つ。

対ゲリラ戦、偵察行動、地形観察の達人。

ありがちな軍人的顔。やや長身だが一般的な背の高い男。

フィデリオ・アルベリヒ（20）

南部方面軍第5師団第4中隊 予備役第4師団第2大隊第1中隊第1小隊第2分隊付

特技兵（携帯無反動砲）3等軍曹

ヒーサ村出身。父親が高名な兵器設計技師で、本人も自覚はないがそれなりの学力を持ち、大学へ進学。

大学での単位取得により短期兵役（6か月）+下士官候補（最大3か月）の対象であったもののラッシュ社会主義共和国の侵攻により予備役配属となった残念な人。

曲射武器の扱いが天才レベルで、短期兵役の期間中に特技兵資格（取得には基本18カ月かかる）を得るということをやってのけた。

顔つきだけで言えば旧日本軍の青年下士官。どちらかと言えば小柄。

アーニー・ブライトナー（20）

北部方面軍のとある小隊付き狙撃兵の護衛兼観測手 スポッター 予備役第4師

団第2大隊第1中隊第1小隊第2分隊

ヒ サ村出身の女性。ラツシユ皇帝紛争に志願兵として参加。以前はフィデリオを寝込ませ、ヴィレムを悶絶させた程料理が下手だった。

家が食堂兼飲み屋兼宿屋兼雑貨屋兼射的場兼時計店という変な店であつたこともあり雑学王と呼ばれたことも1度や2度ではない。

また銃オタクであるため、大抵の銃は扱える。

若干そばかすの多い褐色肌。探せばその辺にいそような程度の美人。貧乳。だが気にしない。身長はフィデリオとほぼ同じ。

グスタフ・パーシウス (35)

予備役第4師団第2大隊第1中隊第1小隊第2分隊長 曹長

中部出身の偉丈夫

おおらかな性格

口癖は「俺の部下は1億人いる！」

長い顎鬚が特徴。若干痩せている。飛びぬけて長身(2m10cm前後)。

マクシミリアン・ギバルシュ (28)

予備役第4師団第2大隊第1中隊第1小隊第2分隊 装甲車砲手

3等軍曹

北部出身の優男

生真面目だが基本的に機嫌、目付きともに悪い。

ソニアの婚約者で、ヴィルフリートのいところでもある。

結構なイケメン。長身だがグスタフ程ではない(1m95前後)。

ソニア・レイタス (26)

予備役第4師団第2大隊第1中隊第1小隊第2分隊 装甲車操縦士

1等兵

体格の良い美女

やさしさの塊のような存在で、分隊の母親的存在。

美女。巨乳。長身（2 m前後）。

ストラトス・ノーヴァ （42）

予備役第4師団第2大隊第1中隊第1小隊第2分隊 2等軍曹
無表情な男。見た目だけなら20代で通じるが、中身はまごうことなきおっさん。

注意力、集中力ともに高くポイントマンとしては最高の人材。分隊のご意見番的存在

若者顔。無精ひげを生やす。平均的身長（1 m75 cm前後）

ヘルマン・シベリウス （18）

予備役第4師団第2大隊第1中隊第1小隊第2分隊特技兵（狙撃）
1等兵

筋肉質な男。全身これ筋肉の塊。18歳という歳に合わず中身はほぼ完ぺきなおっさん。

ローサの兄でラツシュ皇帝紛争では妹と共に“赤髪の天使”や“赤髪鬼”と呼ばれるほどの狙撃で担当地域の傾きかけた戦況を5分5分までに戻した。

ごっつい顔つき。鼻ひげを蓄える。身長1 m80 cm前後

ローサ・シベリウス （17）

予備役第4師団第2大隊第1中隊第1小隊第2分隊 2等兵
儂げな少女。兄とは似ても似つかない。

異名の“赤髪の天使”の由来は彼らが赤毛であることと、彼女の容貌によるものが大きい。

白兵戦では無類の強さを誇る。

美少女。まな板。身長1 m50 cm前後

ヴィルフリート・ギバルシュ （19）

予備役第4師団第2大隊第1中隊第1小隊第2分隊 装甲車機関砲

要員 3等兵

軽い性格の男。彼の女好きにはグスタフさえ舌を巻く。

マクシミリアンのいとこ

にきび面。きつちりとひげを剃る。身長1m75cm前後

リー・ウェーバー (24)

予備役第4師団第2大隊第1中隊第1小隊第2分隊特技兵(衛生)

1等兵

気弱な分隊付衛生兵。

糸目。ひげが無い。身長1m60cm前後

ブリアン・リージ (41)

予備役第4師団第2大隊第1中隊第1小隊第2分隊特技兵 (通信)

3等兵

隊付通信兵

同年代のストラトスとは気が合う。

おっさん顔。無精ひげを蓄える。身長1m80cm前後

ニコライ・カリーニヴィチ・クルーガー (38)

予備役第4師団第2大隊第1中隊第1小隊 小隊長兼臨時中隊長

小隊長 少尉

多忙な人。部下思いだがまれに部下に大量の仕事を押し付け休息を取る。

部下からは“70%の信頼、28%の好意、2%の殺意”を持たれている。

おっさん顔。無精ひげを生やす。身長1m75cm前後

クルツ・スミス(22)

技術者兼テストパイロット。大学在学中に名機と呼ばれるほどのスポーツ機を作成。卒業後はF&W社に入社し、戦闘機FW180、

KS210を設計。その若さにして『鳥神に愛された男』という二つ名を持つ。

国、地域

サクソン連邦公国

この物語の舞台となる国。スカンディナヴィア半島に位置する。暦はオーギュスト暦を採用し現在1943年立憲君主制を敷く3つの民族、公国からなる。

コーネリウス公国

最北部に位置する国家。現在の大公はイエーガー3世。先代のベルゲン2世がサクソン王。彼の手により改革が行われ、結果的にサクソンの科学技術が発展した。産業は鉱工業。先住民のサクソン人、およびラツシユ系が多い。

フアビウス公国

中部の国家。現在の当主ヴィルヘルム1世は現サクソン王でもある。産業は農、漁業

住民のほとんどをサクソン人で占める。

ウィンザー公国

南部の国家。当主はグレッグ2世産業は林業、および木材加工。住民はダーナ王国からの移民が多い

軍服

戦闘服：男女共通。迷彩の上下。

下士官兵男用制服：詰襟。冬黒、夏白の上下。襟と左袖に階級章が付く。サイドアームは各自が自由に持つ。

士官用制服：男女共通。冬は丈の長い黒コート、夏はブレザー。サイドアーム用のホルスターがベルトについているが、この格好で使うことはまずない。

下士官兵女用制服：冬黒、夏白の丈の短いベルト付ワンピースと同色のニーソックス。動き回りづらいと不評である。

ダーナ王国

サクソンの西に位置する島国。
かつてのサクソンの宗主国
立憲君主制を敷く。

ラッシュ社会主義共和国
ヨーロッパの東半分を領有する大国。
数年前まで帝政であった。

2年前に以前の皇帝が権威復活のため起こしたのがラッシュ皇帝紛争。

紛争はサクソン、ダーナ等各国の連合軍の介入もあり、半年で終結。

武器

R - 1928 オリバー

サクソン軍制式ライフル。

弾薬7・62ミリ×55ミリ

ポルトアクション式歩兵銃

命中率が高くAR 1942が採用された後も狙撃銃として活用される。

まんま99式長小銃。

AR - 1942 デビッド

サクソン軍制式ライフル

弾薬7・62×30ミリ

半自動歩兵銃

サクソン軍制式新型ライフル。減装薬のため低威力だが反動が小さく撃ちやすい。

派生形としてAR - 1942 (mg) 機関銃型 通称D - mag
が存在する。

STG44のセミオート型。

R - 1928 カーネル34

試作ライフル

オリバーを半自動化したものの。評判は良かったものの機構部に欠陥があり改良の必要があったため量産されなかった。

R - 1928 カーネル38

試作ライフル

カーネル34の改良型。軽量化と機構部の改良により素晴らしいライフルとなったが、命中率の差で惜しくも制式採用を逃す。相当数出回り、員数外戦力として装備する兵士もいる。

AA R - 1939 アルベリヒ

サクソン軍制式対装甲ライフル。

弾薬20x75r

サクソン軍制式対装甲ライフル。組み立て式の軽便なものだが、威力は折り紙つき。

ちなみにこのライフルはフィデリオの父が設計した。

モデルはバレットm99

ヴァイストパトローネ/Vist Patrone

対戦車榴弾発射筒。採用名はATR (Anti Tanker
rohr) 1940

対戦車榴弾を発射するための筒

使用する弾丸により射程が30〜200まで存在

対人榴弾も発射でき、非公式ながらもロケット弾頭の発射が可能。ただし曲射用照準器しかないので、ロケット装弾の命中精度は非常に悪い。

モデルはリロード可能なパンツァーフアウスト

ヴァイストフライヤー/Vist Flier

対戦車ロケットライフル砲。採用名はATRRC (Anti Tank Rocket Rifle Cannon) 1942

対戦車榴弾発射用の筒。

ただし パトローネより洗練されライフル状の形になったほかロケット弾頭の使用が公式的に可能となった上に弾薬が後装式となった。モデルはrpg-7

4型装甲車リンクス/Lynx

装輪式歩兵戦闘車。採用名はV-1934

主装備：C 1928 35ミリ速射砲 OR C-1925 9

0ミリ迫撃砲 OR VL-1930 火炎放射機

副装備：MG-1930 20ミリ機関砲 OR MG-1929

12.7ミリ機関砲

乗員：3名

搭載スペース：人員10名

最大装甲：25ミリ

最高速度：70キロ/時(路上)

サクソン軍の歩兵戦闘車。戦車より安く、なおかつ旧式軽戦車並みの装甲と火力を施した、歩兵支援用には傑作の車輛。

採用当初は性能にほれ込んだ兵器局がこの車両を主力戦車にしようとしたほどのポテンシャルがあった。

召集師団にも多数配備されている。

オリジナル。決して丸っこくないが避弾経始を狙った急角度の装甲を装備した車体に控えめな大きさの砲塔がのっかっている。

FW 180A

単座戦闘機

最速 536 km/h

上限高度 8500 m

航続 900 + km

巡航 400 km/h で 2 時間 +

武装 20 ミリモーターカノン

12.7 ミリ機関砲 × 2

クルツの名作その1。1200hpクラスのエンジンを搭載した単発機。

モデルはFW 190

KS 210

複座機

最速 550 km/h

上限高度 8000 m

航続距離 1800 km

武装 35 ミリ機関砲 × 2

7.62 ミリ機銃 (機首固定) × 2

12.7 ミリ後部機銃 × 1

クルツの名作2。初期型から1500hpクラス双発のため出力に
文句はなく、対戦闘機戦以外はそつなくこなす万能機

モデルはBf 110

設定集（後書き）

とりあえずこんな感じ。新しいものが出たら更新します。

帰郷（前書き）

所々パ口が出ますが気にせず読んでください。

帰郷

…眩しい。

貨物兼用の乗合馬車に軍服姿で乗っていた里帰り中の青年　フィデリオ・アルベリヒ　は体を起こすと周囲を見回した。

幼少のころ釣りに行った川。

小学校の遠足で行った、頂上に砦の築かれた丘。

「帰って、来たんだなあ。」

彼の故郷　ヒーサ村　はもうすぐそばだ。

「よう、やっと帰ってきたか。不名誉除隊で。」

偶然村の入り口にいた在郷軍人であるヴィレム・ドールマン中尉に会ったのは馬車から下りてすぐのことだ。

「うるさいです、中尉殿。満期です、満期。そっちこそ左遷されればなしじゃないですか。」

「はっはっは。若いの。元気だな。」

「25のくせして、あんた幾つだよ。」

あきれるように呟いた彼はまっすぐ村に進もうとしたが中尉に呼び止められた。

「なんだよ。暇人。」

「いや。近頃北の国境警備隊の連中がよ。しょっちゅうこの辺に出てくるから。それに注意しろ。」

「北、って共和国か？」

「ご名答。今のところ小部隊の斥候らしいから追っ払っただけだ。だがいざとなると事がかい。だから疎開令を出しておいた。」

「今ここには何人くらい？」

「私みたいな在郷軍人が20人と家族で60人。自警団と疎開したからない面々が合計100人前後。まあ、全員に行きわたるだけの

デビッドライフルと手榴弾それと数はないがバリストパトローネもあるぞ。」

「パトローネはこの際良いとして。なんでデビッドなんかがあるんだ？正規軍でも完全置き換えはもう少し先だろ？」

「正規軍は半年前に北・西方軍への配備完了で今はお前さんのいた南方軍や海軍陸戦隊への配備中だが、それも生産は完了してあとは運ぶだけで今余りが大量発生してるからそれを調達したわけだ。」

「へー。ま、いいさ。なんかあつたらその時に。」
強引に話を断ち切るとフィデリオはそのまま家代わりの食堂兼飲み屋兼宿屋兼雑貨屋兼射的場兼時計店に進んだ。

「おばちゃん、空き部屋1つくれー！」

村に、というか多分この国にも1件であろう食堂兼飲み屋兼宿屋兼雑貨屋兼射的場兼時計店に入るなりフィデリオは叫んだ。

「あんた、あたしに喧嘩でも売ってんの？マジで共和国の北の果てまでぶっ飛ばすよ。」

そこにいたのは女将ではなく彼と同年の修行中らしい女性　アーニー・ブライトナー　だ。

「失敬、で。空き部屋くれ。」

「半年ぶりに、しかも行くあてなしの着たきり雀で言うセリフがそれか？ただいまぐらい言え。ただいま位は！」

怒ったようにしているが一応鍵を渡してくれる。

「料金は素泊まりで1日15ターラー、ま、元軍人にだったら安いもんでしょ。なんなら今のうちに払っとく？」

彼女が手提げ金庫を出したのでとくに断る理由の無い彼は5ターラー紙幣を5枚出し彼女に渡す。

「射的場、使うぞ。」

「はいはい、どのテッポウ撃つの。」

「デビッド」

「デビッドは1回につき5ターラー、それと弾は30コートだから20発1ターラー。お徳用の120発入りは5ターラーね。」

「120発くれ。」

「で、合計がご破算願いましたは宿代15ターラー也ライフル使用料5ターラー也弾薬5ターラー也で計25ターラー。もらうよ。」

算盤で計算する彼女を後目に彼はそそくさと裏口へまわり射的場に入った。

銃声を響かせつつ彼は顔をあげた。

この弾もやはりきっちり狙ったところから15センチ左にずれる。もうこれで2つ目のマガジンを空にしたのでこれは多分銃の癖、あるいは彼自身の癖なのだろう。

彼なりの分析ではこの銃は結構良いものという評価だ。

まずセミオート式というのがいい。

ボルト式のオリバーライフルを撃っていた彼にはボルト操作なしに発射できることと一度に一五発もの弾丸を装填できるという物は斬新な機

構として映った。

また弱装弾を使用するためオリバーライフルより反動が軽いということの魅力だ。

命中精度、初速ともまずまずで軽量な事も相まってより実戦向きの銃だろうというのも高評価の理由だが考えなしに撃つとすぐに弾が減るといのは若干いただけに思った。

それから彼は撃ち続け80発程度残したところで日が暮れ、射的場が閉鎖されるのに合わせてそこを出た。

「よう、若いの。またあったな。」

酒場兼食堂でその声をかけたのは昼間会ったドールマン中尉だ。

もつとも彼は構わず夕食セットを頼むとももの5分で食べきった。

「しっかし、中尉殿。最近不景気ですなあ。」

夕食セットのコーヒーを飲みつつ彼はドールマンへ話を振る。

「だな。軍縮条約が発効しちまったから俺たちは危うく職無くすし、お前さんは実際職無くしてる。民間はどうかといえばここんとこの物価高騰で経営が厳しくなりかけてる。」

「そこに来ての王国と共和国の不仲ですよ。まったく。これからこの国はどうなるんでしょうか？」

ちょうどその時轟音と共に地面が揺れ。次いで外が一気に明るくなった。

帰郷（後書き）

ゆっくりまったり続きを上げます。

奇襲前編

「照明弾、だな。」ドールマンが窓から周囲を確認し判断する。

「共和国、か？」

「もちろん。ほかにどのだれが撃つ？」

で、これから私は防衛線に向かうが、ちと敵さんの勢力がでかい。であるからによってフィデリオ、お前さんには市街戦の用意と住民の避難と消灯を自警団の連中と協力してやってくれ。」

「了解、できる限りをやります。」

「で、アーニー、元小隊付き狙撃兵の護衛兼観測手スポッターなんだから狙撃はできるか？」

「500メートルまでなら何とか。そこから先は神頼みってとこ。」

「では、迫撃砲、機関銃等の重火器の射手を黙らせる。」

この戦いでは自警団と軍人それからお前達市民の対応によって今後が左右されるだろう。

何はともあれ各自生き残ることを第一に考えて行動するように。

以上。出撃。」

訓示らしきものを残しドールマンは照明弾により明るくなった市街地 村であるが に消え、

「天窓から撃つから。市街戦になったら援護よろしく。」

若干出窓のようになった天窓に梯子をかけ、アーニーがその出窓部分から長いスナイパーライフルを外に向け、迫撃砲を探し出し、

「ま、短大の演習で習ったことでも実践するか。」

カウンター脇のロッカーに置かれたデビッドライフルを取り出し、フィデリオは弾薬箱を持って外へ出た。

フィデリオが向かったのは街に四か所ある北方軍屯所の一つである

小屋だ。

「いない……」

そこは全くのもぬけの殻だ。彼は一瞬考えると

「中尉さーん！避難とかに人裂いてますかー？」

大声で質問した。

「おう。さつき自警団員を一五人ばつかし回した！お前は大通りとかいかにも敵が来そうな所に適当に仕掛け罠を仕掛ける！」

「了解！屯所の資材 使いますよー！」

「好きなように使え！あと俺たちには分かるようにしといてくれ！彼はあるところには爆弾を仕掛け、あるところには花火を仕掛けまたあるところには灯油とアルコールを撒き、またあるところには穴を掘り、という風に仕掛け罠の作成を始めた。

一方アーニーはというと、

「見つけた。」

一発目の照明弾が燃え尽き周囲が真っ暗になりいざ二発目が撃たれようとした時だった。

（距離五八〇、無風高度差五）

癖で敵との間合いを取り強烈な銃声を立て発砲。

「迫撃砲手、撃破。」

ポルトを操作し、迫撃砲に群がる敵兵を撃つが、一発目以降はなかなか当たらない。

「腕がなまったものね。」

そう言いつつも新たに発見した重機関銃手（距離三八〇）に照準を合わせ発砲。

「重機関銃手、撃……。」

そこで彼女の手が止まった。

自警団並びに在郷軍人団が防戦を開始してから四〇分が経過したところで共和国軍の擲弾が着弾しヒーサ村北門が破られた。

それを確認すると教会の鐘楼に陣取ったフィデリオは仕掛け罠その一につながる長いテグスを引っ張った。

そこからきっかり四秒後門の脇に設置された仕掛け爆弾 手榴弾と石膏ボード、火薬、金属片などを組み合わせた代物の破片がいましがた突入した部隊に降り注ぐ。

「……また来たか。」

それに構わず突入した第二部隊はしかしごく浅い落とし穴に足を取られ、それを確認した彼が仕掛け罠その二につながるこれまた長いテグスを引く。

その直後その落とし穴が爆ぜる。これも手榴弾を用いた即席の地雷だ。

「……こう上手くいくとはな。」

彼にとっては足止め程度の効果しか無いだろうという予想だったが、異様にうまくいってる。

とその時彼は大通りで防戦している軍人たちの後ろを突こうとしている別動隊を発見した。

（飛んで火に入る、夏の虫！）

彼はその方向へ曳光弾を放つ。発射された弾丸は光の尾を引き狙いたがわず道に置いていた酒瓶に的中するとその一帯 灯油をまいておいた が火の海になる。

と、その炎の明かりで門の方を見た彼は絶句した。

奇襲前編（後書き）

彼らが絶句した対象とは何でしょうか。ということの後編に続く

奇襲後編（前書き）

多分短い。ちと劣化気味

奇襲後編

「戦車、か」

奇しくも同じタイミングで口をあけた2人はしかしそれぞれすぐに戦車を撃退するための方法を行う準備に出た。

「中尉！どこだ！」

こちらはフィデリオである。

彼はドールマンの言っていたバリストパトローネ 対戦車榴弾 を探していた。

「何だ、若いの！」

老人か何かのような口調のドールマンの声がぎりぎり聞こえる位置から彼は大声で呼んだ

「パトローネどこだ！」

「屯所だ屯所！」

彼はそれを聞くなり屯所へ走った。

ところ変わってここは宿屋後略の出窓である。

そこから断続的に銃声をひびかせているのはやはりアーニーだ。

彼女が狙っているのは戦車の弱点といわれる履帯やペリスコープ、キューポラのガラス面だ。

だがやはり小銃弾では効果は薄い。

履帯を撃つても足止めはできないしペリスコープにはそもそも腕の問題で当たらない。

だが運よく当たった1発がキューポラに当たりガラスにひびを入れることに成功する。

「私ができるのはせいぜい目潰し位だからさっさとやれよ。中尉。フィデリオ。」

屯所に着いたフィデリオは倉庫からそれらしき箱 縦長で頑丈 を
取ると中身を確認する。

「150の筒と対戦車弾頭と対人弾頭が各5、か。」

彼が訓練で撃つたことのあるのは、新式のバラストパトローネ20
0だ。だが基本的には発火機構の付いた筒から榴弾をぶつ放すとい
う至極簡単な代物だ。

「いつちよ、やりますか。」

彼は戦車のある方向へ駆け出した。そしてすぐに、

「敵、発見。」

軽戦車を見つけ、轟音を立て発砲。

着弾と同時にメタルジェットが発生し、数秒後弾薬に引火し消し飛
ぶ。

だがその先には大量の戦車が待ち受けていた。

彼は迷うことなく裏道経由でドールマンの所へ向かった。

ドールマンの傍には散弾銃を構えたアーニーがいた。

「来た、か。」

ドールマンは若干あきらめた口調で言い出した。

「これ以上の交戦ではここに留まる意味はない。だから今後は遊撃
戦という形になる。お前らが逃げる時間ぐらいは作ってやる。さっ
さと消える。」

2人はそれが理解できなかった。

「消えると言っているだろう!」

一喝が降る。

「そいつは、出来ねえは。中尉。俺らは元軍人で、今もこうやって
る。逃げるなんざごめんだ。」

素直な意見を言う。だが、

「だから何だ!お前らは今何様だ!一般人だろうが。ここは戦場な

んだ。」

「だからって、故郷を見捨てて言い訳にはならないでしょう！」
その一言でドールマンの表情が変わるが一瞬で平時の顔に戻る。

「ここでむざむざ紛争の時みたいに市民を殺されてたまるかよ……
だから……だから早く行け。」

その言葉で2人は気づいた。彼がどんな覚悟なのか たとえ死んでも国民を守るということを。

「中尉。死ぬなよ。」

「またどこかで、中尉さん。」

2人はそうとだけ残すと夕闇にまぎれ遮蔽を取りつつ南門へ消えた。
「貴様ら！ここから先は通さん！」

大声と共に火炎瓶を戦車へ投げ、すぐにそばの通りへ遮蔽を取り、
そして味方の銃声を合図にまた一人戦車搭乗員を撃った。

「フィデリオ、中尉さん、無事かな……」

「無事を信じるしかないさ。」

2人は歩きでそのままヒ サ村を離れ、5キロ程度のところにいた。
「……蛍、だ。」

先に見つけたのはアーニーだった。

「ほんとだ。」

つられて彼もその蛍を見る。

「蛍。俺らと、中尉さんと、そしてこの国を守ってくれ。」

彼は呟くように祈ると足を進めた。

奇襲後編（後書き）

短いとか言いつつ1000字以上だった。集中ってすごい。何なら短いとか言わないと良かった。

多分ここでヒ サ村編終了。ここからは多分召集師団編になります。多分。

召集師団入隊（前書き）

更新がだいぶ遅れました。

でも期末テストも終わって、夏休みも近いんでしばらくしたらまた続きが出るでしょう。多分

召集師団入隊

気づくと彼は2段ベッドの下段にいた。

「ここ……どこだ？」

彼の疑問はその直後に響いた起床ラッパの音で解決された。

つまりここは軍事施設で、今は午前6時前後である。

何はともあれ彼は厄介事に巻き込まれないように着替えて、それから記憶を確認しだした。

「まず昨日……一昨日の気もするけどその日の夜共和国がヒーサに攻め込んで、中尉さんとかと戦って、それで逃がしてもらって、それから夜通し歩いて……」

「で、俺たち第4召集師団第1連隊第2大隊第1中隊の装甲車がお前さんと美人な姉ちゃんを拾った、ってわけで、」

彼は向かい側のベッドの上段の主 長身の偉丈夫 から説明され虚を突かれた。

「それから、半日かけてこの基地へ来たってわけだ。」

そのまま話を続けたのはちょうど向かい側のベッドの主 機嫌の悪そうな顔の優男 だ

「ともかく、さっさと小隊長のそこ行って来い。話はそっからだ。」

「は、はあ。」

上段の主が半ば命令口調に言った一言をしかし彼は疑問に思った。

「なぜ、小隊長何ですか？ 人事権は中隊長にあるはずなんですけど。」

「

「ああ。それか。まったくもってあの中隊長、兵舎の階段踏み外して鎖骨折ってたんだ。」

「だから、後送。今は南の軍病院にいるはずだ。そして今、人が足りていないから小隊長が中隊長を兼任してるんだ。」

彼は話の大筋を掴むととりあえず部屋を出て隊長室へ向かった。

「来たか。」

その小隊長の執務室には小柄な、目つきの悪い、少尉と中尉の襟章特務と書いてあるが、着けた男がいた。

「先日拾って頂きましたファイデリオ・アルベリヒです。」

「ようこそ、クソツタレな臨時前線基地へ。」

俺がその第1中隊臨時中隊長のニコライ・クルーガーだ。

早速だがお前さんのことはすでに調べさせてもらった。残念ながらお前さん、予備役だからここに配属ということになった。」

「で、曲射武器の特技兵とのことだから第1小隊に組み込ませてもらうぞ。」

その時バタバタと立てつけの悪い扉の反対側から駆け足の音が入り込み、

「先日拾って頂いたアーニー・ブライトナーで……す。」

あいさつをしながら飛び込み、しかし入口の段差で転びかけた彼女がいた。

「とりあえずお前らは今日から第1小隊に合流しろ、以上。もどつてよろしい！」

しばらくの後食事ラツパが鳴り2人は混雑に紛れ込み食堂へ入った。

「おう！新入り達。こつちだ。」

彼らを見つげ机を叩いたのは長身の偉丈夫だ。

「さてと、食いながら聞け。第2分隊最後の欠員補充はこの二人だ。こつちのアルベリヒが短期下士官候補上がりで3等軍曹、こつちのブライトナーが召集ってことで1等兵だ。全員さよう心得るように。かかれ。」

空気を読むのは隊員にとっては簡単な事で、実際に食いながら聞いていたものはいなかった。

「ところで分隊長、あたしたちの自己紹介はいらんのかい？」

まず口を開いたのは偉丈夫に負けず劣らず体格の良い美女だ。

「おう、忘れてた。ってわけで自己紹介だ。

俺はグスタフ・パーシウス。35歳。第2分隊の分隊長で、階級は曹長だ。」

「装甲車要員その1マクシミリアン・ギバルシュ3等軍曹。一応主砲担当だ。」

グスタフの右隣に座った優男が言う。

「あたしが装甲車要員その2のソニア・レイタス1等兵。操縦士で、そのマクシミリアンの婚約者です。」

わざとらしい声で言ったのは優男の向かい側の美女だ。その言葉にマクシミリアンが難しい顔をする。

「ストラトス・ノーヴァ2等軍曹。おもにポイントマンをやってる。」

無表情な男が機嫌が悪そうに言う。

「ヘルマン・シベリウス1等兵。狙撃もできるが、下手だ。」

筋肉質な小男が謙遜しつつ言い、

「妹のローサ・シベリウス2等兵。一応スポッターってところかな。」

まるで似付かない少女が付け加える。

「俺は装甲車要員その3ヴィルフリート・ギバルシュ3等兵。機関砲手でマクシミリアンのいとこに当たるんだ。よろしく、ブライトナー1等兵。」

まだ10代に見える少年をけん制する意味でマクシミリアンが睨みつける。

「僕が隊付衛生兵のリー・ウェーバー1等兵。できれば怪我しないように願います。」

気弱そうな青年が言う。

「で、自分が通信兵のブリアン・リージ3等兵。よろしくお願いいたします。」

生真面目そうなおっちゃんが締める。

「この11人でやっていく。いいな？」

「おう。」とか「はい。」とか「ええ。」といった賛同の声が響く。その時である。

「あー、全員いるだろうか？」

臨時中隊長のニコライが食堂の端でマイクを使って話し出した。

「先日肋骨とか鎖骨とかを複雑骨折して全治数カ月のエンプレス中尉に代わる中隊長が赴任なされた。」

そう話す彼の右手にはアーニーもフィデリオも見知った男が立っていた。

「……」

二人の間には微妙な沈黙が挟まる。

「えー、私がヴィレム・ドールマン中尉だ。新しい中隊長として鋭意努力する所存だ。さよう心得るように。」

「……ええええええええっ！」

二人の絶叫が響き残念ながら中隊長新任式はいささか締まらないものとなった。

召集師団入隊（後書き）

次は多分戦闘パートです。

始まりの始まり

「中尉さん、何で生きてるの。」

ヴィレムの私室に呼ばれたアーニーは開口一番に言い、

「……勝手に殺すなよ。」

半ばあきれつつフィデリオが突っ込む。

「まあな、悪運もあるが、やっぱり俺の専門は逃げ隠れしつつの戦いだ。やることやってほとんど全員脱出させたんだが……」

ヴィレムの明るかった顔が若干暗くなる。

「……守れなかった奴もいた。」

それに、だ。俺みたいに召集された奴も1人や2人じゃない。本音を言えば戦争なんざやりたくねえ。そうだろ。」

2人と従兵がそろって頷く。

「だが、この国にいる以上仕方ねえ。早く戦争が終わるように努力せにゃならん。わかっ……」

「失礼します。出撃命令です。」

彼がしゃべっている最中に通信班の士官 新任と書かれた少尉の階級章を付けている が入ってきた。

「……なんでまた俺のここに来る。無線連絡は当直士官に回すのが基本だろう。」

「当直のクルーガー少尉は膨大な仕事を部下に与えて姿をくらませた、との情報を得ました故ここに来ました。」

「ちなみに今の当直士官はだれだ。」

あきれたものも言えない2人を無視しヴィレムが質問する。

「パーシウス曹長がやってきました。」

「とりあえず出撃をかける。」

「了解。」

通信士官はそのまま部屋を出て数十秒後にブザーが鳴った。

「2人とも何をしているんだ。さっさと準備をしろ。」

言われるまま2人は自身の部屋へ急いだ。

響く爆音、たまに鳴る銃声。敵兵、味方の怒号。
ここは間違いなく戦場だ。

(クルーガー少尉はなんつってたっけ。)

“

「ただいまよりブリーフィングを開始する。
必要があれば各員メモを取るように。」

クルーガーが言っていたのは数時間前のことだ。

「昨晚23時50分ごろこの基地から北西に40キロほどのところ
で敵1個中隊程の戦力が野営していたのを偵察隊が発見。今回の作
戦は彼らを撃破、もしくは撃退させることだ。

敵には車両が確認されていないがそこまで国境から200キロある。
開戦から3日でここまで来たのならおそらく車両が存在すると考え
ていいだろう。

上からは無理しないようにと連絡が来ている。

俺たちも無理しないように敵の撃退に集中しよう。

以上。何か質問はあるか？」

「敵に何か特徴はありますか。」

聞いたのはマクシミリアンだ。

「普通の歩兵らしい。偵察隊が先遣部隊かのどちらかだが、気を抜
かなければ十分勝てる相手だ。」

「戦場にどうやって移動するのでしょうか。」

アーニーの質問に対し、

「40キロも歩いて行ったら日が暮れらあ。車で行くんだ。車。
答えたのはストラトスだ。」

「他に質問はないな。」

今回の戦は場合によっては戦況を変える可能性もあるが、深く考えず目の前のことに全力を尽くすこと。いいな？」

”

彼は地面の溝から周囲を確認した。

敵は距離100メートル前後から迫撃砲も使いつつライフルで攻勢をかけている。

一方こちらはというと、

装甲車が主砲の35ミリ砲で榴弾をぶっ放し重機関銃やライフルで敵の進行を防ぐという守りの姿勢を取っている。

「榴弾手！何やってんだ撃て！」

その指示を忘れかけていた彼はすぐにヴァイストパトローネから対人用の榴弾を撃つ。

仰角を付けて放たれた榴弾は、特徴的な風切音をたて敵部隊の中心付近に落下し爆発し、敵の悲鳴が上がる。

「突撃来たぞ！機関銃手。弾幕！」

突撃を迎え撃つ立場にある彼らの分隊に配置された機関銃手はアーニーだ。

彼女は遠慮なく9発ずつの弾幕を張り、突撃を防ぎ、それでも到達した敵兵 十数人がもはや数名になっていた がフィデリオに向かってくるが彼は無造作にヴァイストパトローネの散弾を装填し、遠慮なくぶっ放した。

辺りには一部がなかったり血まみれだったりする敵兵の遺体が残ったが、彼は頭を振り、他の敵の状況を調べる。

その20メートル左側でも生き残った敵兵がいた

「これでも、喰らえ！」

ストラトスが手榴弾を高く放り投げ、

「サヨナラです。」

ローサの銃剣が首を裂き、それらはすぐに対処された。

そのように迫撃砲や榴弾で数が減った敵兵の動向を遠くから観察していたヴィレムはしかしできれば見つけたくないものを見つけた。

「戦車、か。」

「分隊長、戦車があるそうです。」

ブリアンが無線連絡を伝える。

「聞いたか野郎ども。」

敵さんは戦車があるようだが落ち着いて対しよ……退避！」

パーシウスのその言葉を遮ったのはその戦車の榴弾だ。

「無事か！」

10個の同意の音がするのを確認したうえで後ろに誰もいないのを確信してフィデリオは対戦車榴弾を放ち、敵戦車の上面に当て、破壊した

そこから見えたもう1両はというと、

「今だ。」

段差を登ろうとしたところをマクシミリアンの操作する装甲車の35ミリ砲で底面を撃たれ撃破された。

それを見た敵兵たちは総崩れとなり撤退を開始した。

「深追いするな。だそうです。」

通信を伝えたブリアンの声で隊員たちは落ち着いた。

「よし。全員帰還するぞ。」

1人もかけてないことに笑顔を持って装甲車に乗り込もうとしたパーシウスだったが。

「きゃー、衛生兵！衛生兵！」

そのそばにいたソニアが絶叫した。

彼の背中は血まみれであった。

「どうしましたか……」

その傷を顔面蒼白のリーが手当した

装甲車の中で治療された彼は翌日見事に何もなかったかのように復帰した。

「まったく。血まみれであんな笑顔出せるなんて、どこの戦神だよ。」

「というヘルマンの言葉もあり、戦後飲み会の話のタネになったであつた。」

始まりの始まり（後書き）

改良の余地あり。いずれ改良します。

それぞれの交錯（前書き）

さて、航空機と新キャラを出しますよ。

それぞれの交錯

「戦死が1……第3中隊のエドワード3等兵が特進して1等兵、か一人でも消えるのは辛いな。」

朝早く、というより夜半を過ぎた頃一人執務室で呟き、報告書に記載したのはやはりというべきかヴィレムだ。

「遺体処理はどうします？」

臨時の手伝いをしている女性下士官が聞いた。

「こっちは分は今日葬式。敵さんは明日の早朝か今晚にでも出発して埋葬しよう。……。重傷と軽傷の人数をもう一回言ってくれ。」
報告書の手を止めずに答えたのち質問する。

「重傷3人、内障害が残るのは1人で、軽傷は6人、入院の必要はありませんが2、3週間は戦闘参加は無理ですね。では今日午前10時にエドワード1等兵の葬儀を行い、明日の朝遺体処理ということの問題はありませんね。」

「ああ、構わない。……本日の戦闘に勝利すれども戦死者あり。敵の錬度はなかなか。油断すべからず。と。……よし、終わり。寝る。」

彼は机に散らばった筆記用具を回収し、私室へ戻った。

その翌々日、彼らは前回の戦場にいた。

なぜなら、彼らの任務に「遺体処理」というものが存在するからだ。「遺体処理」とは戦時国際法で正式に定められた軍のやるべき事の1つで、簡単に言えば戦場の後始末をすることだ。

「……」
フィデリオは無言で敵の死体をシートに包み、中隊の独立工兵小隊

が掘った穴に埋めた。

この作業は辛い。

仲間がこんな姿になるのでは、という不安と、敵兵とはいえ人を撃つたという事実を否応なく実感できるのだ。

彼が黙々と作業を進めていると、手を止め、俯いているローサがいた。

(……泣いてる?)

彼女が気付いたのだろう。

「すみません。見苦しいところをお見せしました。」

彼女はそれだけ言うと手を再び動かした。

その数十分後、小休止の時間になるとローサが彼の元へ近寄ってきた。

「隣、失礼します。」

そう言っただけでそばに座りこむと、彼女は話し出した。

「私達、本当に戦争してるんですね。」

「……そう、だな。」

話が見切りきれなかったので、彼は適当に応じた。

「因果な商売だよな、兵隊って。」

3食付き、住み込み、制服支給、命の保証なし。言ってみるのは簡単でも実際はこうだ。」

「そう、です。私も何回かこの作業はしましたが、いつも味方がこくなる気がします。」

軍曹。私達は一体何の為に戦ってるんでしょうか?」

難しい質問をしてきた、と思った彼は自分の考えを素直に言った。

「友達とか、家族とか、……恋人とか。」

最後に空いた間は若干ためらったからだ。

「そうですね。みんな大事な物を守るために戦っているんですよ。でも、あの方達にも守るべき人や物はあるはずですよ。」

彼女が真新しい十字架に指をさしつづつ言った。

「だから戦争なんざすべきじゃないんだ。」

話に割り込んだのは分隊最年長のストラトスだった。

「兵隊つてのはこういう商売で、命が商品、無くなればそれまでだ。俺も戦争なんざしたくはない、けど守るものがあるから戦う。そのくらいでいればいいんだ。」

空気が重いのは何も死臭だけのせいではないだろう。

その時作業再開の号令がかかった。

その数時間後。

遺体処理の作業と、並行して行われた陣地設営 塹壕や掩体壕掘り、機関銃座の設置などが終わった直後のことだった。

「敵、発見！」

叫んだのは別の中隊の見張り要員だ。

だが地上には何も無い。

ただ轟音が響いているだけだった。

そう、轟音だけである。

「上だ！」

その声につられて彼が上を向くと、多数の航空機が飛んでいた。

「戦爆が16、重爆が4、か……」

総員退避。壕に潜れ！」

ヴィレムが号令をかけ、兵たちはすぐに掩体壕

など上が塞がった所へ飛び込む。

その直後強烈な爆音が軽い衝撃波を伴いやってきた。

「戦爆の60キロ爆弾、だな。」

そう判断したのは2年前の紛争に参加して実際に空襲を受けたパースウスだ。

「けど、それに混じって75ミリ榴弾の爆音がする気がするのな
ぜ？」

聞いたのはアーニーだ。

「知るか。」

答えは素っ気なかった。

「指示です。車両は即座に壕から出て車載機関銃で、歩兵は塹壕や車輛を盾に各種火器で応戦せよ。とのことですよ。」

全員に分かるようにブリアンが言った。
「総員持つてる武器全部使ってあの敵撃てえ！」
どこかの分隊長が放った号令と共に対空戦が始まった。

第2分隊の装備には各自グレネード弾兼用の手榴弾と半自動式のライフルであるAR-1942デビッド、パーシウスとストラトスの私物である半自動ライフルR-1928カーネル38、フィデリオのヴァイストパトローネ、シベリウス兄弟用の対装甲ライフルAR-1939アルベリヒ、アーニー用の支援軽機関銃AR-1942(mg) 通称D-mag が配備されている。

「一番手前のあの敵撃てえ！」

パーシウスが下したのも他の分隊長のものと大差は無い。

その号令と同時にフィデリオとシベリウス兄弟以外の全員が戦爆に向けて各自のライフルや機関銃を連射する。

フィデリオはというと大急ぎで草刈りを始めた。近場にあつた草を適当に刈ってヴァイストパトローネの逆側へ詰め込み カウンターウェイトのかわりだ、誰もいないはずの掩体壕に逆側を向けて制限信管付の対人榴弾を発砲する。そこへ1機の戦爆が飛び込むが、元が対人だから威力は低かったようである。

彼は思案顔でその掩体壕へ隠れた。

一方シベリウス兄弟はというと、塹壕の底面へ伏せて巨大な、けれど驚くほど軽い といつても総重量10キロ弱 の対装甲ライフルAR-1939アルベリヒの組み立てをやっていた。

意外とシンプルな機構部に無骨な金属製ストックを取りつけ、長いバレルを装着、各部を軽く叩いて調子確かめる。

これだけで組み立てが終了するライフルは基本これ以外は存在しない。

「親父……案外ロクな仕事してんだな。」

設計を担当したアルベリヒ技師の息子であるフィデリオは、壕の中で父親のことを見直した。

そのことにはまるで構わず、ヘルマンはアルベリヒを構えるところよ、うどこちらへ降下した重爆撃機に向かって発砲した。

その直後、重爆撃機は機首を爆発させて墜落した。

「敵、1機撃破。」

「……どう、やったんだ？」

啞然としたフィデリオが聞いた。

「筒内爆発だ。75ミリ砲に突っ込ませそうだったから、やってみたらできた。」

「ばけもんかよ。おまいは。」

まさに啞然とした顔でフィデリオが感想を述べた。

「おい。航空支援はまだか？」

パーシウスがいらだった声を上げたのは戦闘開始から30分ほど後だった。

戦況はそう良いわけではなく、敵機は戦爆12機、重爆2機と依然多いままだ。

「30分前にヴェルゼンハイム飛行場よりFW180Aが16機、およびKS210が8機それぞれ発進。巡航速度でこちらへ向かっています。到着予想時刻は間もなくです。」

返事を返したのは通信兵のブリアンだ。

「歩兵部隊。対空戦闘御苦労。以降は俺たちに任せろ。」

彼の背負った無線機から声が聞こえた。

「……繰り返す。こちらはヴェルゼンハイム陸軍第5航空兵団戦闘機隊複座小隊指揮官ハインツ・バルクマン中尉だ。歩兵部隊。対空

戦闘御苦労。以降は俺たちに任せろ。」

「こちら地上の予備役第4師団第2大隊第1中隊中隊長ヴィレム・ドールマン中尉だ。援護感謝する。」

「いいってことよ。これが俺たちの仕事だ。」

航空隊の指揮官はそうとだけ言っと、敵機へ挑んだ。

単発機隊が戦爆を容赦なく撃ち落とし、それをぬって双発機が重爆を付け狙い、ジグザグ戦法で撃墜する。

航空機隊の到着後戦闘はすぐに終わった。

「機種、なんでした？」

ふと気になったフィデリオがブリアンに聞いた。

「FW180AとKS210でした。」

ブリアンが答える。

「FW180とKS210……」

あれ、確かクルツの作品だったような気がする。」

どうせ油が余ってるんだからという戦闘機隊の繰り広げる曲芸飛行を眺めながら彼は呟いた。

それぞれの交錯（後書き）

とりあえずこんな感じ。

後で訂正を加える、かも

閑話 とある休日の一幕(前書き)

遅くなった割にどうでしょうか、この出来具合

ブログ始めました <http://mukamitaka1208> .

blog106.fc2.com/

閑話 とある休日的一幕

「えー、今回新たに5人ほど本分隊に迎え入れることになった。」
そうパーシウスが言ったのは対空戦の3日後の土曜日の昼食時だった。

戦争中といえど作戦立案や休養の関係で、戦況が切羽詰まっていな
い限りにおいては軍も土曜半日、日曜休日という一般的なサクソンの
社会的ルールに基づいていた。

せっかくの休日であるから町に繰り出そうかとしていたフィデリオ
にとつては若干不満であった。

「と、言うわけで自己紹介だ。」

パーシウスの声人が減った昼過ぎの食堂兼会議室に響いた。

「アンドレイ・マルコヴィチ・ブラゴヴォリン2等兵。18歳です。
よろしく願います。」

痩せ型、長身の青年が言う。

「アリサ・ゲオルグヴェナ・ダール3等兵。16歳。暴走天使によ
ろしく。」

ぱつと見その辺のギャルにしか見えない都市迷彩のリボンを頭に付
けた少女だ。

「フックス・ヴァーゼル・ムーン2等兵。21歳。『衛生』の特技
兵で……こいつがカール・ティベリウス2等兵。21歳。『爆薬取
り扱い』の特技兵。無口なただけでよくしてやってください。」

……なんだよ、自己紹介くらい自分でするってか？おめーが普段し
ねえからやってやってんだろが。バーロー。あ、それとも何か？
想い人でもいるのか？……ちょい待て、なんで今こっちに拳銃を向
ける？悪かった謝るごめん！」

若干太った小男が長身の無口男と同時に紹介した。

「トム・バート・ヴェルンブルーム1等軍曹。38歳独身。つてが

あつたら嫁さん見つけてくれ。」

啞えたばこで器用に喋る男が締めた。

「とりあえず16人になったが、別に気にするな。以上。解散」

気を取り直してフィデリオは基地から徒歩20分程のところにある都市「グレンベルグ」に向かった。

その側にはアーニー、クルーガー、マクシミリアン、ソニア、そしてアリサがいる。

なぜこんな大所帯なのか、事の発端は彼らが基地を出る時だった。

「そのこの2人組、ちょっといいか？」

最初アーニーとフィデリオの2人だけだった所にクルーガーが話しかけた。

「グレンベルグに行くのだろうか？ だったら一緒にいかないか？」

別に断る理由も無いので彼らは承諾した。

「ちょっといい？ そのこの3人」

そこに話しかけたのは、人目もはばからずに、昼間からいちゃついている、若干あきれ顔をしたマクシミリアンと目を輝かせたソニアだった。

「グレンベルグに行くのならば、連れて行ってくれないか？ こっちはどっちも方向音痴なんだ。」

(……頼りねー)

装甲車操縦士と砲手なのに、である。

「地図があつたら間違えないんだけどね。」

そう言ったソニアを見、

「大体の方角は分かっているんだが」

言い訳がましく言うマクシミリアンを見た3人は顔を見合わせてから承諾した。

「小隊長、格好良いい(はあと)」

それを物陰から見つめる都市迷彩のリボンを付けた少女、アリサ。彼女は承諾を得ることなく、気配を消したまま5人を追尾した。

「さて、到着。」

6人は大したトラブルも無く目的地グレンベルグに到着した。

別行動をとる予定だった彼らだが、全員が大型書店へと入った。

その中で彼らはどんなところへ行くかと言えば、クルーガーとマクシミリアンが新書、アーニー、ソニア、アリサの3人がファッシュョン誌へ向かい、

フィデリオは何を見ようかと考えていた時、不意に若い女性の悲鳴が上がった。

「何だ？」

最初に気付いたのはクルーガーだった。

「強盗？」

「殺し？」

推測したのはアーニーとアリサだ。

「強盗だろう。見えにくいがぱつと見だと、刃物男が若い女性を人質にしているようだ。」

「同様に確からしい。」

目の良いクルーガーとマクシミリアンが言った。

「どうする。おまわり警察来るのを待ってもいいが、何なら俺らでどうにかするか？」

他の5人に向き直ってクルーガーが聞くと、誰も反対の意思を出さなかった。

それを肯定と受け取った彼はゆっくりと、どこから出したのか分からないマグカップを4つ手に持って強盗に対峙した。

「兄ちゃん、何してんだ？ヒマならおっさんとサイコロ博打しないか。別に悪いようにはしない」

彼は気を抜かずにマグカップとサイコロを9つ投げて続けた。

「ルールは通常の『嘘つきの数当て』と同様。ただしさいころは9つが2人で18個だ。……」

！

その時強盗がナイフを握りなおした。

「おっと、変な気は起こさない方がいいぜ」

彼はホルスターに手を掛けた。

そして、マグカップにさいころを投げ込み、言った。

「おっさんが勝ったらおとなしく自首しろ。その代わり、お前さんが勝ったら少なくとも警察が来るまではお前さんの自由を保障しよう。」

強盗はそれに同意したのだろう。無言でさいころをマグカップへ投げ込んだ。

「おっさんの先攻。」

1が4つだ。」

彼らのやっている『嘘つきの数当て』とはさいころ博打の一種で、それぞれの持つさいころの目の数を当てたり、相手のかましたハツタリを見破ったら勝ち、というルールだ。

「2が3つ」

強盗は顔色を変えずに宣言した。

「3が4つ」

「おっさん、あんた何したいんだよ」

小声で聞いたフィデリオを見事に無視し、クルーガーは続けた。

「2が7つ」

ポーカーフェイスを全く崩さない強盗が2度目の宣言を行う。

「5が4つ。……お前さん。一体何をしたいんだ」

何の目的があつてか唐突にクルーガーが強盗に話しかけた。

「4が6つ。……お前なんかに分かるか」

「6が5つ。……聞き方を間違えたな。お前さん、何のためにこんなことしているんだ」

クルーガーは慎重に言葉を選んでから言った。

「4が8つ。……幸福のためだ」

「6が6つ。……お前、人と自分たち、どっちかを選べと言われたらどちらを選ぶ。」

唐突に違うようなことを言ったが、その相手が動揺することはなかった。

「人を蹴落としても偉くなって、楽しんで暮せってひい爺さんが言っていたらしい。だからそれを地で行くだけだ。……4が10」

「お前さんとはもう少し突っ込んだ話をしたかったんだが……嘘だな。俺のマグには4は1個しかない」

その時強盗の目が危険な光を放った。

それと同時に銃声が2つ響き、同時にクルーガーが飛び出し強盗のあごにつま先蹴りをお見舞いした。

「そういう生き方も、アリなのかも知れない。けどな、人間お天道様の下を歩いて行けるくらいの道徳観と、思いやりってのは持ち歩くべきだと思うぜ」

「……偉そうに説教垂れてんじゃねえよ。税金泥棒が」

その声には諦めに近いものがあった。

「……小隊長。本気で当ててもいいですか」

そのセリフにひどい憤りを覚えたのだろう。拳銃を持ったままのアーニーと、どこから来たのか同様に拳銃を持ったヘルマンが言った。

「弱装ゴム弾でも街中で発砲なんかするんじゃねえ！この馬鹿部下共が！」

クルーガーは自前の自動拳銃　ゴート・グレートミニスター　のトリガーガードに指を引っ掛けてくるくと回しながら怒鳴ってから野次馬が引くのを待った。

野次馬が引くのを待った彼らは、強盗を警察に突き出してから、なぜこんなへんぴな田舎にあるのかが街の七不思議にもなっている

中華街へと向かった。

「結構な大所帯になっちゃったわね」

小声でぼやいたソニアが、山のように盛られたあんかけ焼きそばを人数分に分けているのを横目にして、フィデリオはクルーガーへ話しかけた。

「すごいですね、小隊長」

「博打の腕か？あんなのは場数踏んだらそこそこうまくなるもんだ。おい姉ちゃん、ビールもう一本。大瓶で」

追加の注文をしつつクルーガーは軽くあしらった。

だが、彼が聞こうとしたのはそれではなかった。

「啖呵です、啖呵。あんな状況であんな啖呵切れるのはそうはいないですよ」

「親父が牧師やっててよ、その受け売りなんさ。ほんとはもっと口くなこと言うべきなのかも知れなかったな」

そういうとクルーガーはそっぽを向き、配られた焼きそばに手を伸ばした。

その隣には「隊長、格好いい（はあと）」などと言う少女が、さらにその隣には焼きそばを配りつつも、いちゃつくバカップルが1組、その向かいには仲が良すぎていちゃついているようにも見えるスナイパー兄妹、が座っている。

「さ、食べましょう」

そう言ったアーニーを横目にフィデリオが注文した2人前の炒飯が消えるのに5分とはかからなかった。

「ねえ、ファイ」

夕食からいつの間にか酒盛りになってしまったその場で若干顔の紅くなつたアーニーがフィデリオに話しかけた。

「何だ？」

「……好きこゝろ」

その発言を何もなかったかのように彼は追加注文の3人前の五目汁そばを啜った。

「良いねえ。若いの」

左腕にアリサがしがみついているクルーガーがしみじみと呟いたのもまたスルーだ。

「旨い」

3人前の汁そばは消えるのに15分かからなかった。

「さて、皆さん。もう夜遅いし、何人かは泥酔状態だし、今夜はどこか宿取りませんか？」

言いだしたのは今もヘルマンを担いで、アーニーを背負っているフイデリオの隣を歩いているローサだった。

その計画に異論を唱える者はいなかったため、軍御用達の安宿をとることになり、今はその最中だった。

「フイー、大好きだいしゅき」

寝ぼけているのか、はたまた寝言なのか、しばらく愛称で呼ばれている彼は若干困惑していた。

「お二人は仲がよろしいんですね。」

唐突に話しかけたローサの背中の上には「うう、母ちゃん、もう、食えねえ」等と呻くような寝言を言い続けているヘルマンがのっかっている。

「まあ、な。同郷だし、一時期ひとつ屋根の下だったし」

「結婚してた、とか？」

こう聞かれたら笑い飛ばすしかない。

「そんな訳ねえだろう。俺は下宿人で、こいつはその家の娘さん、って訳だ」

そつちこそだいたい仲良さそうじゃないか」

逆に聞き返してみた。

「兄さんは、私がいなくてんで役に立たないんです。接近戦はお

手上げだし事務処理は小学生にやらせた方がよっぽど早い。掃除洗濯は下手だし料理作らせたら下手な化学兵器より殺傷能力が高い代物が完成するんです」

「そうか。お互い厄介な連れがいるもんだな」

「そう、ですね」

それから数日後、ヘルマンが料理修業を始め、アーニーがとある女性分隊士の元で花嫁修業を始めたのはまた別の話である

閑話 とある休日の一幕（後書き）

絵文字は環境依存になるんで（はあと）ってことにさせていただき
ました。

しかし曲者ばっかだな。この分隊

戦いの、その前(前書き)

結構遅くなりましたが、更新です。
良い話かどうかは別です。

戦いの、その前

「ねえ、軍曹……」

不快感全開でアリサが話しかけたのは、グレンベルグで酒盛りをやってから3日程過ぎた日だった。

（何・で・私達・が・穴掘り・なんか・しないと・いけない・の・です・か）

ぎこちない手信号でそう示した彼女の足元にはシャベルが置いてあった。

（俺・が・知る・わけ・が・ない）

掘削装置やトロツコがうるさいので仕方なく手信号で返し、彼はこのことの顛末を思い出した

*

「では、ブリーフィングを始める。必要があればメモを取るように」

そうクルーガーが言ったのは今日の午前、食事が終わってすぐだった。

「といつても出撃ではない。総員スコップを持って演習場に集合せよ、以上」

そこにいた大多数の人間、クルーガーと事情を知っている者以外は首をかしげこそしたものの、すぐに演習場へ向かった。

そして移動した先ではまた話を聞く羽目になった。

「総員、聞こえるだろうか」

マイクを使って喋り出したのは同じ基地の大隊の工兵隊長である大尉、年齢40前後の妻帯者らしいであった。

「これから諸君らにはこの基地を軽便な要塞にしてもらおう」

その言葉がすべての始まりだった。

彼は分隊ごとの担当地域の都合上半数の人員を預かり、班長とい

う肩書がついた。

「班長、第一連絡通路への連結が終了しました。」

先日配属されたアンドレイが報告に来た。

「御苦労。こっち側もあと10分位で第2塹壕予定地に到着だ。もう一回まっすぐかどうか確認してくれ」

「了解です」

測定機材のある中央側に消えていったのを確認して、彼はまたツルハシを振るった。

「三曹、どうでもいい話をしたいけど、良いか」

穴掘りの翌日の昼食時、唐突にフックスが話かけた。

「構わない、なんだ？」

「カールのこと、かな。あいつの弟が空軍にいるんだ」

「確かに至極どうでもいい」

「で、その弟はスピアー艦上攻撃機に乗ってて、敵撃破数300以上、うち戦車130、航空機8と普通じゃないエースなんだ」

「で、結局なんなんだ？」

「そんな弟を持つてるから、あいつはたまにカッチコチに固まっちゃうんだ。あんたなら分かるだろ、アルベリヒ博士の息子さんよ」

確かに分からないわけではない。

フィデリオも高名な火器設計士の息子ということでもたまに期待や好奇の目で見られることがままあった。その視線は忌避感を持つ程ではなかったが決して気持ちのいいものではない。

「了解。できるだけ善処するつもりだけどこの話は分隊長に回した方がいいと思う」

「あいよ。そうさせて頂きますよ」

そうだけ言うといつの間にか空にした食器を片手にフックスは去って行った。

「では、ブリーフィングを始める。いつも言

うが必要があればメモを取るように」

クルーガーが朝食時に言ったのは要塞設営にかかって約1週間後、そろそろ防壁が完成し、

軽砲やロケット砲などが配置され始める頃だった。

「本日午前6時半頃、機甲第12師団より侵攻してきた敵の機甲部隊との戦闘に入ったとの連絡を受けた。その後機甲12は苦戦を強いられている。今回はその援護へと向かう。出撃は午前8時、各種装備のほか試験中の対戦車兵器および重火器を持っていくのを忘れるな。以上」

”

そのブリーフィングが終わり、現在移動中である。

「何でも良いから昔話をしないか？」

言い出したのは通信兵のブリアンだった。

「なぜに？」

誰かが聞いたがみごとにスルーされた。

「俺からで、良いか？」

沈黙を破ったのはヘルマンだった。

「そう昔じゃないが俺、いや俺らの過去の話だ」

そう言って彼は話し出した

その時、俺が軍に入って2年ちよいだからちよつど開戦直後、その時俺らは独立歩兵第48連隊、通称リール部隊に所属してたんだ。

フィデリオなら知ってると思うがリールはコーネリウス北部の都市で人口8万うち学生1万。独立歩兵48と独立砲兵16それからリール試験航空隊の各部隊が駐屯、別名は学園都市って言って大学が複数あつて主に工学が盛んなんだ。

そんな都市の軍だから基本的な仕事は学生の教練の相手や啓発なんかだった。

そんな部隊だからお世辞にも装備が良いとはいえない。

基本的にはデビットを全員が持つてることになってたが、半数以上がオリバーかその改造型のカーネル34か38、一部だが備品がボロいという理由で、民生モデルだったり払い下げを買い戻したカービンM99Lポールを装備した奴もいた。

ともかくそんな状態で共和国の侵攻が始まったから、みんな大わらわだった。

その時に学生の有志で義勇兵募集や非戦闘員の退避が行われた。

そして共和国が攻め込んできたんだ。

こっちの定数は歩兵48が1500名、砲兵16が500人に対し、10センチ野戦砲10門と15センチロケット砲が15門で、内非戦闘要員がどちらも20%程、試験航空隊は実用機と実験機合わせて180機、学生の改造機も含めると戦闘機が内50残りはおうよくわかんない機体だったな。

敵は機甲部隊および機械化歩兵だったから重火器が必須なんだけど、重機関銃や対装甲ライフル、速射砲なんかは絶対数が足りてなかったし、俺達第2重装遊撃中隊が装備してた狙撃砲……っていうと分かんないか。C-1935 1、平たく言えば35ミリ歩兵がギリギリ運用できる大きくて邪魔だけどその破壊力には注目すべきバイク用エンジン搭載の一応狙撃用の速射砲。は重戦車相手には若干非力だ。

でも使い方と相手によっては十分で、装甲車と軽戦車の破壊や重戦車の足止めが主目標だった。

それで2、3日は持ったんだが、とうとう市街戦になった。

俺らは車両を他に任せて、大学の鐘楼からとにかく敵を撃った。指揮官、砲手、ライフルマン、色々だった。

そこから丸1日かけて攻防戦があり、けれど負けた。でもな、撤退の途中で生き残りの学徒兵にこう言われたんだ。

『あなた方のおかげで僕らは研究の成果、大切な資料と安全地帯に戻ることができません。』

ありがとうございます。』

俺はそれで思ったんだ。俺らはリールを落としてしまった。けど軍人だって事をな。護るべきものがある。だから俺らは戦うんだってことも。

「俺らは護るべきものがあるだから俺は戦える。」

そう言っただけは話を締めくくった。

その時であった。

「な、何なんだよ……あんなの」

機関銃座に着いていたヴィルフリートの悲愴とも言える叫び声が聞こえた。

戦いの、その前（後書き）

ヴィルが見たのは勘が良い人なら分かりますね、多分

更新はいつになるものか……今年中に書き上げなければ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7865/>

戦場に舞う蚩 ファイアフライ

2011年10月7日02時32分発行